

「中国人と日本人」

（争いごとではなく、

交流の歴史を通して）

高橋 寛

尖閣諸島の問題で日中間が大荒れ模様になった年だった。その時の中国人の行動ぶりをテレビで見ていると、上海の大学で3年生に在籍している息子のことが心配になり、毎日電話で様子を聞いた。

大学の授業中に教授が、学生の中に唯一日本人である息子が座っている教室の後ろに向かって「尖閣は中国のものだ」といきなりまくしたてたという。息子も負けずに言い返した。授業中の大教室は、二人の会話以外シーンとしていたという。

また、息子が趣味で通っていたホテルのキックボクシングジムのフロアで、いきなり複数の中国人の若者に取り囲まれて、「尖閣は中国のものだ」とわめかれたという。息子が中国語でさんざんまくし立てたら、あとでゆっくりと言って引き下がって行ったということだった。

その年の五月連休を利用して、家内と上海へ小旅行に行った。息子に案内してもらって歩いた。

喧騒の大都市上海。地下鉄に乗っても人々は顔を突き合わせて大声で話している。そのうるささに圧倒された。食堂なども同様だった。また、買い物時には、店の番人やお愛想を一切しない。買ってくれる人しか興味がない。客がそばにいても、いらっしやいませ一つ言わない。とてもはっきりしている。

バスはバンバン走った。息子の話によると、中にいる車掌のおばさんは、客を見て運賃を決めるといふ。日本人と見ると高くとられる。機嫌の悪い運転手のバスに乗ったときには、乗るとき「早く乗れ。」と叱られ、バスはクラクションを鳴らしっぱなしで乗用車を蹴散らして走った。私たち乗客は手すりにつかまっておとなしくじっとしていた。今の時

代に、こんなバスもあるのだ。日本のバスが、上海のようなことをしたら大変なことになるにちがいない。不思議に思ったのは、口うるさいはずの中国人が運転手に文句を言わないことだった。文化の違いということか、それぞれの領域の「自分の仕事」を暗黙の内にとがいに了解している国民性なのか。

三泊もしてホテルの喧騒にもだいたい慣れてきた日の朝食後に、ホテルの周辺を家内と少しゆっくり散歩をした。街路の両側は、早朝から小さな出店がいくつも並ぶ。道路のゴミを掃く仕事の人があちこちにいる。その傍らを、リヤカーを付けた自転車が通ってゆく。ダンボールを集めて行くのだ。

自転車やミニバイクの二人乗りが多い。見ると、リヤカーの自転車もミニバイクも、中年以上の夫婦がやたら多い。夫婦のゴミ屋さんも多かった。そして、後ろに乗っている夫か妻は決まって終始満面の笑みでニコニコしていた。タイツにミニスカで太った奥さんがさっそうとバイクを飛ばし、後には夫が必死にしがみついているのにも出会った。

「みんな、忙しくて、しあわせそうね。」
家内がそれらを見ながら笑って言った。むろん嫌みではない。

自分の幸福に一番興味があり、そのために人は懸命に働く。他人の仕事や贅沢に関心はない。
今年の五月連休に初めて上海に行ったとき、息子がアパート暮らしをしていたときお世話になったという隣のおばさんを思い出した。息子が電気料を払えないでいたときに立て替えてくれたという。老婦人であったが、にこにこ顔が人柄を示していた。アパートの入口で、家内と三人で写真を撮った。

どこの場所でもふれあいは、人を優しくする。それが人を育てる。忘れられない恩への感謝と優しさへの思いが、私たちを人に行っているのだと思う。そこには、人種も国も関係ない。

中国人と日本人。長い歴史で結ばれた隣人との絆を、島一つのことですうわけにはいかない。

最初の話に戻ると、息子の携帯にその後中国人の友人たちからメールが何件も入ったという。内容は、今は危ないから、外を出歩くな、というものだった。

上海からの帰りの飛行機の中で、家内が言った。

「中国人を好きになったかも。」

私も同感だった。

